

種の体験から世を極めつくし、〈女〉を熟知した作家を想定する事が出来ると思われたのである。それ故、様な女性との比較の果にその優秀さや理想性が語られた「女君」紫の上を描き上げたとき、「おれおれし」き人となり、愛欲の世界をさまよい投身自殺によつてしか救いを見いだし得なかつた「女」そのものの浮舟を描くことの意味が浮かびあがつて来ると考察したのである。そのことは第三章で述べた作家の方法ゆえに紫の上を描ききつても、作家はなおも「女」を語りつくせないと思つていたと思われるのである。つまり作家の意識構造の上では、一つの理想性を荷なわされた紫の上の人物造型があるがゆえ、女の弱さ、もろさしか演じてないような浮舟の人物造型がある意味が明確になるといふことなのである。以上の事から、全篇を通して、同一作家の手による作品の成立が考えうるのである。巻巻の成立論の観点からは再検討すべき論ではある。

堀辰雄論 — Poet-philosopher の遍歴 —

第四回卒業 島崎 紀素子

最近、中也の詩集を読んでいて、次のような詩に出会つた。

器うつわの中の水が揺れないやうに、
器を持ち運ぶことは大切なのだ。

さうでさへあるならば

モーシヨンは大きい程いい。

しかしさうするために、

もはや工夫くわふを凝らす余地もないなら……
心よ、

謙抑にして神恵を待てよ。
(「独語」)

この詩は、私に卒論を思い出させる。

「羞恥」のある文学に行きつまりを、それゆえ「羞恥」を否定する文学に「快適」を見出そうとし、表側で新しい文学の可能性を求めつつ、裏側では、常にその方法を快適な生活に密着させて綴る、そういう堀辰雄という作家の計算された人生の遍歴が、この詩を読むと全くシンメトリカルなものに思われるからである。

中也も堀も「驢馬」の、そして「四季」の同人で、同じくモダニズムの旗手たちであつた。が、彼らは新しい文学の可能性を信ずることでは肩を組み合つても、その文学が何であるかを考えた時、いつも孤立してゐた。彼らの方法はいつも異つていたからである。

堀は「快適」という大前提、——いやこれは神恵であるかも知れない——に忠実で、それを求めてあらゆる影響を自らの器に盛り、そして更にそれを消化する。飲みつくす。ジイドの「女の学校」は、日本の近代においては「かげろふの日記」となつて花ひらくはずではないだろうか。堀の器には、水は常にこぼれる程はない。神恵を待つまでもなくモーシヨンは思いのままであろう。が、これを中也の側からみるならば、満水の器を運ぶという危機に無知であると言えよう。文学というものが、人間に於ける普遍性の追求だとするならば、どちらを取るかと考える必要はない。作家を位置づけるという必要性を私は認めたくない。

堀辰雄という作家は、高原の乾いた空気の中でのみ生き続けたやうに思われている。いや、彼の文学はその中で(以下36ページへ)

論をやつて本当に良かったと思う。というのは、確かに苦しかったし、提出した時点ではこれも書き足りない、あそこはこういう風に書けば良かったのではないかとという風に自分では満足のまま提出したが、一つの形を出したという点で良かったと思うのである。一つのことに対して一年間取り組んだのは一生のうちは何度もあることではないし、例えあまり勉強しなかったにせよ卒論を書く為に色々な図書館や文学館へ通つたこともはじめてである。最初は文献一つ調べるにも方法がわからずまごついたが、これをきつかけとして参考書の使い方、調べ方などを知ることが出来、勉強の仕方がわかつてきたような気がする。一年間で卒論という一つの形で研究（大袈裟な言い方であるが）の過程を提出したが、これはあくまでも自分の選んだテーマのことが勉強の始まりであるということ認識出来た。この点が一番良かったことである。私の場合、単純な理由からテーマを決めたが、今はそれが自分自身のためにこれから先も童話のことについて少しづつ勉強していきたいという気持ちである。こう考えられるようになったのは、一年間卒論と取り組んだ結果からであるから、例えば内容は貧弱であれ、卒論を書いて一つのきつかけをつかめたことを嬉しく思う。

※

※

※

〈20ページからつづく〉

のみ文学として成立しているかに見られている。軽井沢が何だというのだろう。サナトリウムが何だというのだろう。一つのバトスが言い得ているなら、一つの美がそこにあるなら、それで良いではないか。泥まみれの人生も、高原で営まれた人生も、すべては天が人間という生物に与えた短い時の流れ、時は、平等に、今日から明日へとよどみなく流れている。人間は、その中で、「器の中の水が揺れないやうに、／器を持ち運ぶ」だけ、モーシヨンの大きさにも所詮限りがある訳だ。雄々しく歌われているこの詩の裏に、はてしない詩人の不安を私は見出す。そして、更に、作家の意識の流れを追おうとする時、コミュニケーションの空しさを感じ、はては言葉というもののむずかしさに行きあたらないわけにはゆかない。

今は、ただただ、「謙抑にして神恵を」待つばかりである。